

委員会部会活動報告

デザイン部会

延藤氏の「まち育て論」からうかがえる
今後の建築の意味

デザイン部会長 連 健夫

9月のデザイン部会の例会に千葉大学教授の延藤弘弘氏を招いて「まち育てにおける場所性」という講演をして頂いた。豊富なスライドとユーモアのある語り口に引き込まれ、何か映画を見ているような楽しい雰囲気の中に、氏のまち育てに対する熱意と強いメッセージを感じることができた。

「街づくりという言葉は本来の創造的な意味から離れ、単なる手続きとして使われており、すでに手垢がついている。これからはまち育てがキーワードであろう」、そして「まち育てとは居心地の良いハードとソフトづくりであるが、同時に人づくり、魂づくりの営みである」。また場所性について、「空間が場所になるのは人間が空間と出来事との関係に内側から出会う時に生育する想像力によるところが大きい」、さらには「ユーザーの想像力の羽を羽ばたかせるのは対話と協働のプロセスである」と明快に語られた。この意味を具体的に「高知県赤岡町の夏祭り」「もやい住宅Mポート」「コーポラティブ住宅ユーコート」を事例としてスライドで分かりやすく説明された。

興味深いことは、これらのスライドには、やたら人が多く登場したことである。子供が笑顔で駆け寄ってくる姿、住民全員で太鼓を楽しむ様子、車椅子のおばあちゃんが楽しく話している姿などである。これは、建築家の講演で、よく見られる空間だけのスライドとはまったく

異なる印象を持つ。これこそが、氏の言う人間と環境との共振の姿なのであろう。

氏の説明には時間の流れと、その時々々の出来事がある。住み手と協働で行う設計のプロセスから完成した建築と生活との関係、さらにはこの関係がどのように変化しているかという追跡調査など、氏が時間軸を大切にしていることがうかがえる。

これは言い換えれば建築の物語性であろう。建築を空間としてだけでとらえるのではなく、人とどのように関わっているか。偶発的な出来事がどのように発生し変化しているかという物語である。これは、文脈を大切にするという「コンテクスチュアリズム」や出来事を時間で繋げていくという「ナラティブ」などの現代建築思想に通じるものがある。建築の変遷を大きく「象徴」→「様式」→「空間」という視点で捉えてみると、今後の建築は「物語性の建築」であるのかもしれない。設計のプロセスが建築に評価軸と意味を与え、建築の使われ方やそこで生じる出来事に物語が生まれるということであろう。この物語の意味が建築のメッセージであろうし、建築のコンセプトと捉えることもできよう。この底流にあるものは、自己完結型建築家の空間の押し付けではなく、ユーザーの創造性や文脈、風土や環境の読み取りの中で意味を見つけ出そうとする姿勢であり、建築家に全人格的な能力を求めめることを意味しているのではなかろうか。

さて、実態はどうか。首を傾げたくなくなるような建築家が大手を振って活動している。建築家を選ぶ側の問題なのか、社会の受け皿の問題なのか。延藤氏の講演から様々なことを考えさせられた。氏が当日持参した著書「まち育てを育くむ」（東京大学出版会）と「何を目指して生きるんや」（プレジデント社）は、もちろんその日完売であった。

（有）連健夫建築研究室 主宰



「もやい住宅Mポート」での子供たち